優秀賞（臨床工学技士部門）　八木 貴之

医療機器管理業務を教えてくれた大先輩

当院のME科には、私の父よりも年上の医療機器管理のスペシャリストがいた。昭和を感じさせる先輩は、無口でぼやきながら指導していく人であった。最初の仕事は、医療機器の清掃と医療機器に貼るバーコードのテプラ作成と院内の電球交換である。清掃のコツや、バーコードの剥がれないシールの貼り方や電球交換のコツなど一見医療機器管理業務につながっていないと思わされる業務を淡々とぼやきながら教えてくれた。

私はいつからか、ME室（医療機器管理室）のノムさんだと思いながら先輩がぼやくたびに仕事のヒントがないかを集中して聞くようにしていた。少しずつ医療機器の点検方法のコツや点検計画書の作成方法や長年の体験から得た医療機器の故障しやすい部品のことなどを教えてもらった。

先輩は、3年後には定年退職を迎えることが決まっていた。そういった中で私は細かく指導を受けたのである。指導しながらよく「何を残すかなんや!!」とぼやいていた。臨床工学技士ができて約30年あまり、当時は先輩が一人で知名度や認知度の低い中、病院で仕事をしてきたと思うと血の滲むような努力の末、院内のME室の確保にこぎつけたはずだ。ある日、輸液ポンプの定期点検後病棟で流量誤差のインシデントが起きた。原因は、粘度の高い輸液を投与したことであった。この機器を点検したのは私だったが内心、機器側の問題の可能性は低いことを確信していた。それは、細かいところまでも清掃から定期点検して異常のない状態で貸出した自信があったからである。

私は、雑用と思われがちなことを徹底したことで今では、機器点検の際の小さな異常も見落とさない技術を身につけることができたと思っている。去年、先輩は定年を迎え立派に勤めを終えた。その姿を見て、寂しい気持ちと次のME科を守るのは自分達であるという責任の重さを自覚させられた。ME室のノムさんのおかげで今の私はいる。

https://ja-ces.net/jinzai/